

## 〔学会企画シンポジウム趣旨説明〕

### 「台湾原住民族にとっての霧社事件」

—特集に寄せて—

駒込 武

#### はじめに

本特集には、第11回学術大会（2009年6月6日、於日本大学文理学部）における学会企画シンポジウム「台湾原住民族にとっての霧社事件」に関係する論稿を収録した。

従来の学術大会は分科会と記念講演から構成される形式が一般的だったが、第11回大会では記念講演に代えてシンポジウムを開催した。これは、第10回大会における創立10周年記念シンポジウムでの議論を受けて、ディシプリンを異にする人びとが一同に会して議論できる場が重要と判断したためである。大会実行委員の中で垂水千恵（敬称略、以下同様）と駒込武が企画にあたることになり、「台湾原住民族にとっての霧社事件」というテーマでシンポジウムを設定した。

パネラーとしてタクン・ワリス（Takun Walis / 邱建堂、仁愛郷民政課長）、呉密察（成功大学教授）、北村嘉恵（北海道大学准教授）の3人にご報告をお願いし、春山明哲（早稲田大学教授）と下村作次郎（天理大学教授）にコメンテーターをお願いした。タクン・ワリスにはヤユツ・ナパイ（Yayuc Napay、京都大学大学院）、呉密察には楊子震（筑波大学大学院）が通訳にあたったが、報告はそれぞれの意思により日本語で行われた。司会進行は、垂水と駒込が担当した。

本特集には、パネラーの報告、コメンテーターによるコメントの要旨のほか、『清流部落生命史 Ltlutuc Knkingan Sapah Alang Gluban』（簡鴻模、依婉・貝林、郭明正編著、永望文化、2002年）の一部——ダッキス・パワン（Dakis Pawan / 郭明正）による「清流部落簡史」、タクン・ワリスによる「口述歴史」、タクン・ワリスの父方の「族譜」の抜粋——を掲載している。よく知られているように、清流（かつての川中島）は霧社蜂起に参加した部落の住民が強制的に移住させられた土地であり、今回パネリストとしてお招きしたタクン・ワリスは『清流部落生命史』に「霧社事件遺族代表」として「序」を寄せているので、その報告の背景を知るためにも重要な資料と判断したからである。これらの文書はシンポジウム当日も参考資料として配布した。

#### シンポジウムの趣旨

霧社事件というテーマは、台湾研究の中で決して目新しいものではない。ことに歴史研究の領域では、むしろ例外的なほどに注目を集めてきた出来事といってもよい。その霧社事件を取り上げた趣旨をまず説明しておきたい。

霧社事件にかかわる古典的研究として、戴国輝編『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』（社会思

想社、1981年、2002年に国史館から中文訳刊行) を挙げるができる。その序文において、戴国輝は、「誰が誰の歴史を記述するのか」という次元の問いを提起し、「台湾のマイノリティ「高山族」(中略)の代わりに、彼らの抵抗史は書けないし、また書くべきでもない」と記した。その上で、自分たちの研究は「高山族」による「歴史創造の主体性確立をめぐるアイデンティティを索める運動」の中で歴史叙述が試みられるまでの「つなぎ」であると位置づけた。戴国輝がこの序文で「予見」したように、1980年代半ば以降、原住民権利促進会の活動が展開され、これまで沈黙させられてきた原住民族の声がさまざまな形で社会生活の前面に立ち現れるようになった。「高山族」という名称はもはや用いられなくなり、「台湾原住民族」という呼称が自称として用いられるようになった。霧社事件の主体についても、セデック (Seediq / 賽德克) —— 従来はタイヤルの「亜族」とされていたが、2008年に台湾政府により独立した民族として承認された——、その中でもタックダヤ系統の人びとによる武装蜂起として語られるようになった。タイヤルからセデックへの転換は、もとより名称変更にとどまるものではない。そこには新しい「われわれ」意識と、その活性化を促した政治的・社会的な状況が存在すると考えるべきだろう。

霧社事件をめぐる歴史叙述・記憶のあり方も、こうした状況の中で新しい局面を迎えつつある。注目すべき近年の研究として、鄧相揚『抗日霧社事件の歴史』(下村作次郎・魚住悦子訳、日本機関紙出版センター、2000年)など鄧相揚の一連の著作、クム・タパス (Kumu Tapas / 姑目・荅芭絲)『部落記憶-霧社事件的口述歴史 (I) (II)』(翰蘆、2004年)、簡鴻模とイワン・ペリン (Iwan Perin / 依婉・貝林) が中心となって編集した「生命史」三部作(『清流部落生命史』、『眉溪部落生命史』2002年、『中原部落生命史』2003年)を挙げるができる。これらの著作には、蜂起に参加した人びとばかりでなく、「味方蕃」として動員された人びとや、日本人警察官と原住民族女性の子どもを含めて、事件を直接に見聞した者とその近親者の語る「口述歴史」が示されている。そこからは、かならずしもひとつの歴史像には収斂しない、多様で複雑な経験と記憶のあり方が浮かび上がる。

たとえば、600頁を越える大著である『清流部落生命史』は、膨大な「族譜」がその中心をなしている。本特集に一部を掲載した「Nguhan 家族族譜」(タクン・ワリスの父方の系譜)に即してその一端を確認しておきたい(75頁~76頁)。□は男性、○は女性、■●はそれぞれ養子・養女に出されたものを表わす。人名の右側には、生没年(不詳の者も少なからずいる)、教育歴、死亡の様態(戦争などで不慮の死を遂げた者は☉、自殺は☿、病死は☺)、その契機となった「重大な歴史的イベント」(霧社事件は♂)、宗教的帰属(天主教は⊕、台湾基督長老教会は⊖)を表わす記号もつけられている。

タクン・ワリスの曾祖父バガハ・ポッコハ (Bagah PuKoh / 安田甚一 / 邱烈) はロードフ社 (alang Drodux) の頭目であり、その5人の妹の内の3人は霧社事件の時に不慮の死を遂げ、1人は自殺している。タクン・ワリスの祖父タクン・バガハ (Takun Bagah / 安田治次 / 邱安田) の前妻イワン・ペリン (Iwan Pering) は「第二霧社事件」(♂\*)、弟のワリス・バガハ (Walis Bagah) は「霧社事件後の清算」(♂\*\*) で殺されている。ダッキス・パワン「清流部落簡史」(53頁~64頁)によれば、ワリス・バガハは、頭目だった父の身代わりとして殺されたということ

ある。タクン・ワリスの叔母にあたるルビ・マホン (Lubi Mahun / 安田ミエ子 / 張呈妹) は、モーナ・ルーダオ (Mona Rudo) の娘マホン・モーナ (Mahun Mona / 張秀妹) の養女となっている。タクン・ワリスは報告で彼女たちが祝宴のあとにいつも悲しい歌を歌っていたと話しているが、こうして語り伝えられた歌を採譜したのも『清流部落生命史』には収められている。

『清流部落生命史』の「族譜」は、すでに当事者にもよくわからなくなってしまった親族関係を、広範な聞き取り調査に基づいて復元したものである。その一端を垣間見ただけでも、「1000人を越える犠牲者」という抽象には還元できない、膨大な固有名詞に圧倒される。同時に、これまで霧社事件について語られてきた固有名詞がモーナ・ルーダオ、ダックス・ノビン (Dakis Nobing / 花岡一郎)、ダックス・ナウイ (Dakis Nawi / 花岡二郎) などごく少数の人物に限定されていたことに気づかされる。

『清流部落生命史』の焦点は霧社事件にだけ置かれているわけではないことにも留意を要する。「重大な歴史的事件」には、日本の軍隊・警察の霧社への侵入の契機となった「人止閣事件」(1902年)や「姉妹ヶ原事件」(1903年)、「台籍日本兵」すなわち「高砂義勇隊」への徴募ということも含まれている。タクン・ワリスの「口述歴史」(65頁～74頁)でも、モーナ・ルーダオの最期の地をつきとめたエピソードと並んで、父からワナの仕掛け方を教えてもらった話や郷公所における汚職の話なども記されている。個々の人物にさまざまな歴史的事件が折り重なる状況の中で、霧社事件は、個々人にとっても、「セデック族の歴史」という観点からも、歴史の中の一齣に過ぎないともいえる。

こうした問題点を意識しながら、今回のシンポジウムのテーマを「台湾原住民族にとっての霧社事件」として設定した。その趣旨は、いわば霧社の「内側」から表れてきた多様な声と対峙しながら、霧社事件をめぐる歴史叙述において排除してきたのはどのような事実・人びとなのか、そうした問題を自覚し乗り越えていくために手がかりはどこにあるのか、ということを考えようとするところにある。事件にかかわる直接的記憶の「外部」に位置する者が、霧社事件を「栄光ある抵抗戦争」として称揚する場合であっても——あるいはそうした場合においてこそ——もっぱら自らの関心にしがたって歴史像を描こうとしてきたのではないかという検証も必要であろう。もっぱら文献史料に依拠した歴史叙述と「口述歴史」を基盤とした歴史叙述をどのように統合していくのか、という方法論にかかわる問題も検討すべき課題である。

## 報告の概要

3人のパネラーの報告について、その主旨を企画担当者としての観点を交えて整理すると以下のようなようになる。

タクン・ワリスは、セデック族の社会的・文化的な規範としてのガヤ (Gaya) の観点から、霧社事件の意味を次のように論じた。日本による統治以前、セデック族はともにウツフを崇め、ガヤを守って暮らしていた。しかし、自分が生まれ育った時代の清流では「部落意識」が混乱していた。女性たちが祝宴のあとに悲しい歌を歌い、酒に酔った男たちが言い争う姿に接して

かつて悲惨な出来事が起きたことは知っていたが、老人たちが沈黙を守っていたために、霧社事件の内容について知ることになったのは大学生になってからであった。日本人は「姉妹ヶ原事件」と呼ばれる「毒殺事件」を通じて霧社に侵入し、「和蕃結婚」政策などによりガヤを混乱させた。霧社事件も、頭目と長老が部落に共通することがらを決定するガヤが乱れていたからこそ青年たちの憤りを引き金として生じたものであり、鎮圧の過程でさらに同族は互いに首を打ち合ってはならないというガヤに反した行為が行われることになった。

タクン・ワリスの報告は、「かつて日本人によりたくさんの人が殺された」という次元に止まらず、現在の台湾原住民族の生活にも深い影響を及ぼしている問題として事件の意味を捉え直す必要を示している。報告の最後で「セデックの三つの方言グループ」は現在ではともに「手を携えて未来を創ろうとしている」と述べているが、それは、霧社事件とその「事後処理」の過程でセデック族を構成するトロック群、タウツァ群、タックダヤ群の間にいかに深い亀裂が刻まれたか、それを修復するのがいかに困難であったかを示唆するものでもあるようにも思えた。

呉密察は、日本および台湾における霧社事件の研究史を省みながら、霧社事件研究の課題を明確にする報告を行った。まず戴国輝編『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』に即して、蜂起を鎮圧した側が事件の性質や詳細に関する発言権をほとんど独占してきたことを霧社事件研究にかかわる本質的な困難として指摘し、この困難を乗り越えるために事件の過程で幸運にも死を免れた台湾原住民に「口を開き語らせること」があったとしても、特定の証言者に偏るなどの問題があったと論じている。さらに、1990年代以降の台湾における研究動向を紹介し、簡鴻模と依婉・貝林による「生命史」三部作はそれ自体が「一種の傷あとを拭い去る作業」としての意味を持っていることを指摘する一方、クム・タパスが「乱雑で、多元的で、常に変化する、さまざまな個人的記憶」の重要性を指摘しながら、日本側官憲資料だけに基づく歴史叙述はもとより、「原住民エリート」による歴史叙述にも異論を呈している事実に着目し、誰が霧社事件を叙述し解釈すべきなのか、抗日蜂起に参加しなかった人びとをどのように評価したらよいかといったクム・タパスの問いかけを——彼女が（いわゆる「味方蕃」の主力をなした）タウツァ群の末裔を自称しているという出自の問題に還元せずに——近代歴史学の課題として追究すべきだと説いている。

北村嘉恵による報告は、タクン・ワリスや呉密察が投げかけた問いに対する、ひとつの応答としての性格を備えていた。北村は、タックダヤ群の中でもパーラン社の人びとが蜂起に参加しなかったのはなぜなのかという問いを掲げた上で、『中原部落生命史』等を読み解く作業を通じて、1903年の「姉妹ヶ原事件」においてパーラン社の被害がとりわけ大きく、男の働き手を突然にして大量に失った女性たちが生き延びることの困難に直面し、婚姻をめぐるガヤの混乱さえも生じた事実に着目する。その上で、「いかに生き延びていくかという抜き差しならない問題」が繰り返し顕在化する文脈の中で「蜂起に参加しない」という選択がなされたことの意味を理解すべきだと論じた。北村はまた、「事件後」をいかに生き延びたかという問題にかかわって、タイヤル族のロシン・ワタン（Losin Watan／渡井（日野）三郎／林瑞昌）が「花岡一郎」について「胆力ナク意思ノ薄弱ナリシコトヲ嘆セサルヲ得ス」などと述べた事実をとりあげながら、この発言がなされた場がそれ自体として「尋問」という性格を備えていたことに注意を促すとともに

に、複数の国家からの「期待」と疑惑にさらされ続けたロシン・ワタンが戦後白色テロで殺された事実まで射程を及ぼしながら、霧社事件にかかわる先の発言、長男林茂成によるこの発言の評価を読み解くべきであると主張している。林茂成は総督府による蜂起の鎮圧を「最小限」「寛大」な措置と評価しているのだが、「皆殺し」「絶滅」の恐怖をふまえなくては、この発言がなされた意味に近づくこともできないということであろう。

霧社事件それ自体が「(姉妹ヶ原) 事件後」のいわば「余震」が続いている中での出来事であり、さらには戦後も、そして現在も、さまざまな事件の「余震」が継続している事態の中で、何を「事件」とみなして、何を「資料」としてどのように読み解こうとしているのか。北村の報告は、「研究する主体」のあり方を鋭く問うものであった。

## 討論と今後の課題

今回のシンポジウムでは、3人のパネラーの報告に続いて、休憩時間にふたつの映像を上映した。ひとつは、春山明哲が自らのコメントにかかわって要請した、「霧社蕃害事件」と題する戦前のニュース映画である(『朝日新聞』2009年11月1日付記事でこの映像の存在がニュースとして報道された)。もうひとつは、『海角七號』で著名な魏徳聖監督による「賽徳克巴萊 Seediq Bale」という制作中の映画のプロモーションビデオである。この映画の公式ブログ(<http://www.wretch.cc/blog/seediq1930>)ではモーナ・ルーダオへの評価が人によりまちまちであるために何度も台本を修正したことや、セデックの言葉を話せる若者の俳優を捜すのに苦労したことなどが記されている。これらの映像の制作経緯、霧社事件の表象のあり方をめぐる落差は、それ自体としてひとつの研究のテーマになりうるだろう。

休憩後にはコメントと討論が行われた。コメントの「趣旨」は、45頁～51頁に掲載した。春山明哲は、「蜂起しなかった」人びとの経験の複雑さをどのように捉えるかという北村の問題提起に賛意を表しながら、あらためて「花岡一郎」「花岡二郎」の存在について検討すべきと述べた。下村作次郎は、今日ではガヤの本当のあり方を知ることがほとんど不可能になってしまっていると述べた上で、ガヤを回復しようとする試みの重要性を強調した。ガヤの回復はいわば「どうしても取り返しのつかないことをどうしても取り返そうとする」(木下順二の言葉) 試みということになるだろう。

時間的制約のために質問を受け付ける時間は乏しかったが、フロアで参加していた鄧相揚がタクン・ワリスに日本における霧社事件研究をどのように評価するかと質問をしたほか、川島真がなぜ今日においてセデックという意識が登場してきたのかという質問をした。これらの質疑を深めることはできなかったが、今後の焦点となるべき課題は浮かび上がってきたといえる。さしあたって、以下のようにまとめることができよう。

第一に、「ガヤ」という観点の重要性である。春山明哲によれば、岡松参太郎などによる「旧慣調査」においても「ガヤ(ガガ)」という言葉は少なからず登場する、しかも、その理解は調査者によって少なからぬ隔りがあるということである。統治者が「ガヤ」をどのように認識し

ていたか——その認識の歪みの検証を含めて——検証する必要がある。

第二に、霧社の「内側」から表れてきた膨大な「口述歴史」を、文献史料と照らし合わせながら読み解いていく作業が必要である。同時に、呉密察報告で明確に指摘されているように、さしあたって霧社の「内側」とされる人びとも決して一枚岩ではなく、深刻な亀裂をはらんできたことを自覚する必要がある。北村報告で着目したパーラン社の女性たちは、これまでの霧社事件をめぐる叙述の中では周縁的とみなされてきた存在であった。今回のシンポジウムで明確になったのは、特定の「証言」に依拠して「これこそが真の霧社事件だ」というような言明をすることはもはや不可能であり、セデック族タックダヤ群の内部においてもそれぞれの地位、ジェンダー、世代等によって異なる経験があり、異なる歴史の見方があるという当然の事実をふまえないといけないということである。

第三に、春山コメントでも指摘されているように、戦前と戦後を一貫した視点から山地の社会経済史の研究を深める必要がある。残念ながら今回のシンポジウムでは、タクン・ワリスから仁愛郷（かつての霧社）民政課長としてどのような「民政」上の課題に直面しているのかという話を聞くことはできなかった。しかし、なぜ今日においてセデック族という意識が高まり、ガヤの回復が重要な課題として意識されているのかという問題も今日の「民政」上の課題と深く関わっているのであろうし、霧社事件をめぐる歴史叙述もこうしたひと続きの事態の中で模索されていると理解すべきであろう。

今回のシンポジウムを開催した理由は、台湾研究という共通のフィールドを持ちながらディシプリンを異にする人びとが議論をする機会を設けようということであった。それにもかかわらず、登壇者は歴史学系と文学系に偏ってしまった上に、舞鶴『餘生』——「餘生」は生き残った者、生き延びた者の意——のように霧社事件にかかわる重要な文学作品をとりあげることもできなかった。だが、霧社事件というテーマが、戦後台湾の政治・経済研究、民族学研究、ジェンダー・スタディーズなど多様なアプローチも必要としていることは今回のシンポジウムを通じて明確になったともいえる。この特集に収めた諸論考が、学際的な議論の深まりのための、ひとつの起点となることを願っている。